Ⅱ．史跡の概要

１．史跡周辺の環境

（１）史跡の位置と地形

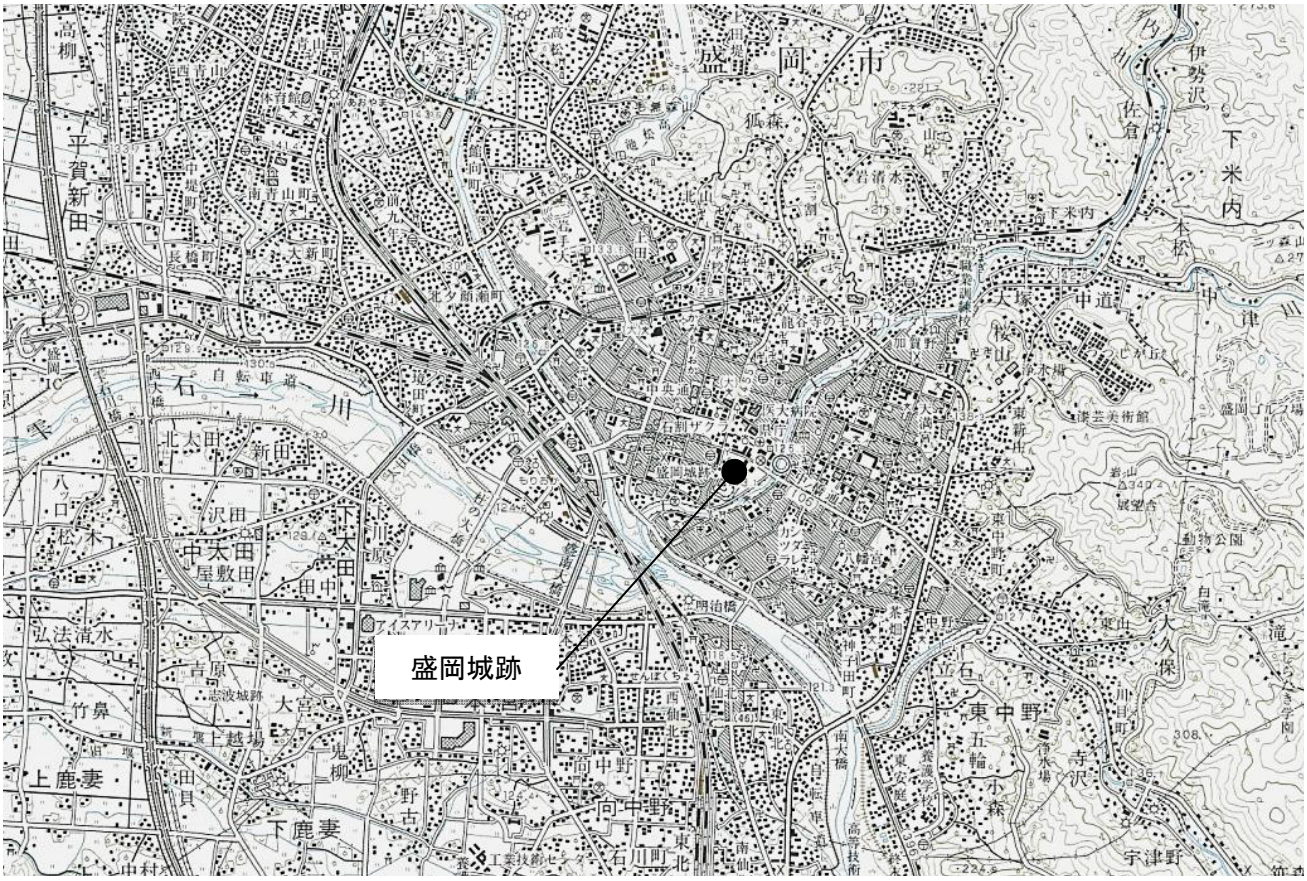
本市は，北上盆地を貫流する東北地方最大の河川である北上川と，奥羽山脈を水源とする雫石川，北上高地を水源とする中津川，簗川等が交わり，岩手山や姫神山等の象徴的な山並みを中心市街地から見ることができる水と緑に囲まれた都市である。

地形は概ね，北部と東西が山地及び丘陵地となっているほか，平地が南に開け，北上川，雫石川，中津川等の河川が流れる「蔵風得水（ぞうふうとくすい）」の地形となっており，風水思想によると都や城などの立地に適した地であるとされている。

史跡盛岡城跡は盛岡市市街地の中心部である内丸に所在し，東日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ東日本）盛岡駅から東に約 1.2 キロメートル，徒歩で約 25 分の場所にある。

かつての盛岡城周辺の地形については，藩政時代に星川正甫（ほしかわせいほ）により編纂された地誌『盛岡砂子（もりおかすなこ）』に収録されている『盛岡舊図（もりおかきゅうず）』（５頁第２図）によると，北上川の流れは現在と異なり，現在の旭橋付近から大通り・菜園方向に大きく蛇行して不来方城の丘陵に突き当たり，城の南側で中津川と合流していた様子が描かれている。また，雫石川が現在よりも南側を流れており，北上川との合流点も南側に位置していたこともうかがい知ることができる。

現在の北上川はＪＲ盛岡駅付近を南流して雫石川と合流しており，盛岡城築城当初よりも流路が西に移っている。これは，寛文 13 年（延宝元年 1673）にはじまる河川改修によるもので，



第１図　史跡盛岡城跡の位置

この工事の後に，大沢川原や川原町といった新しい町がつくられている。

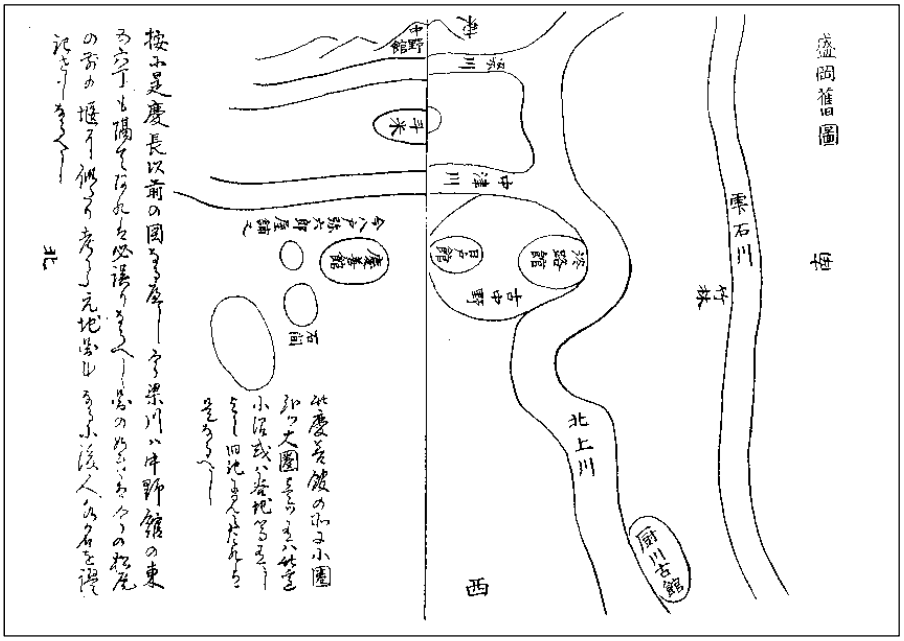
また，北上川と中津川の合流点の北側に，「古中野」と書かれた囲みが描かれ，その中に「淡路館」・「日戸館」と記されている部分が見られる。この部分が後の盛岡城の御城内（内曲輪）に相当する範囲で，「淡路館」は本丸・腰曲輪に相当し，「日戸館」が三ノ丸に相当する範囲と想定されている。

さらに，古中野と書かれた範囲の北側には，慶善館と書かれた囲みと，「今八戸弥六郎屋舗也」と記されている部分がみられるが，この部分は現在の岩手医科大学附属病院付近を想定している。この付近で平成 11 年度に実施された発掘調査では，外曲輪周辺の土塁と堀跡が確認されたほか，土塁の下層から慶善館の一部または周辺の屋敷跡と思われる 16 世紀の掘立柱建物跡が確認されている。

この『盛岡舊図』によると，盛岡城の北側に石間という地名のほかに，大小の楕円が３つ記され，「此慶善館の北に小圏弐ツ，大圏壱ツ有ハ，此辺小沼或ハ谷地等有しよし，旧記に見へたれは是なるへし　按に是慶長以前の図なるへし」と記されている。これを現況と比較すると，現在の本町や名須川町付近に沼または湿地が存在したことがうかがえる。（31 頁第９図参照）

この付近については，元文年間（1736～1741）や寛延年間（1748～1751））の盛岡城下図（39 頁に掲載）によれば，上田堤（現在の高松の池）や北山，愛宕町方面等から湧水が流れ込み，三戸町や名須川町付近を通り，遠曲輪の堀を通って旧北上川に流れ込む様子が描かれている。よって，これら沼沢地を埋立てて市街地を拡大するとともに，湧水や小河川を活用したまちづくりがおこなわれたものと考えられる。

これらの小河川・水路等については，近世以降生活雑排水の排水路としても使われていたが，戦後そのほとんどが衛生上の理由から暗渠化されるなど，大部分が改変を受けており，旧状を知ることが難しくなっている。



第２図　盛岡舊図（星川正甫「盛岡砂子」『南部叢書第１冊』より転載）

（２）地質

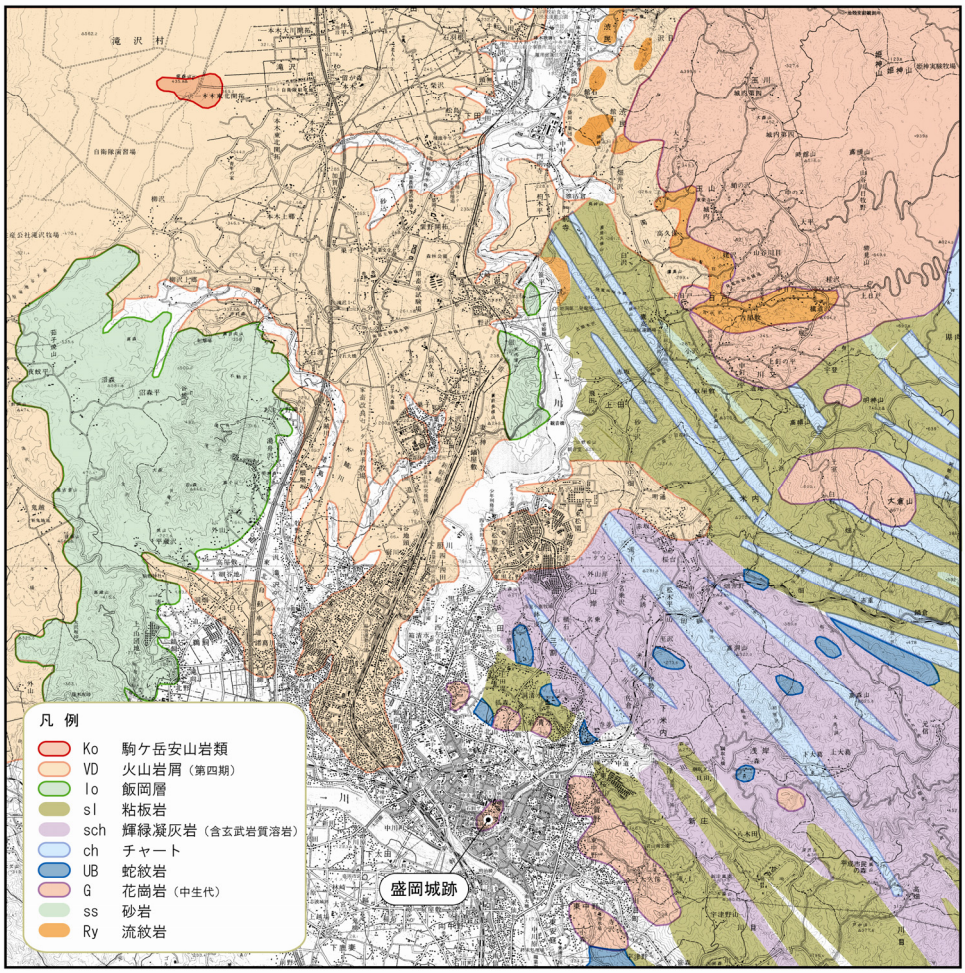
本市の市街地の大半は，北上川・雫石川・中津川等の河川が運んできた砂礫によって形成された扇状地上及び段丘上に立地し，地盤は概ね良好である。

市の山地地盤を構成する地質は，東西で異なっている。東側の北上高地は，中生代・古生代に形成された堆積岩を中心とし，一部の地域には貫入による花崗岩が分布する。一方，西側の奥羽山脈は活火山の岩手山を除くと新第三期の堆積岩及び火山岩が中心となる。

史跡周辺及び史跡指定地は，貫入による花崗岩が分布する地域となっており，周辺では花崗岩の転石が多くみられ，石割桜の石や三ツ石神社の伝説，東顕寺（とうけんじ）開基にまつわる斗米石（とっこべいし）など奇岩・巨石が存在していることや，現在の岩手医科大学付近が石間（いしあい）と呼ばれていたことなど，古くから花崗岩が露出していた地区であったことがうかがえる。

史跡地内では，昭和 60 年に石垣修復と並行して地質調査がおこなわれ，ボーリング調査により深さ７～８メートルまでの範囲について，地層構成と地質，地下水位の有無を確認している。

調査は，二ノ丸西部石垣下・本丸北東部・腰曲輪南側石垣下（彦御蔵北側）の３箇所でおこなわれ，表層より砂質粘土または礫混り砂及び礫混りシルト層・続いて一部で花崗岩の転石が見られるマサ土（花崗岩風化残積土）及び花崗岩で構成されていることが確認された。なお，地下水位については確認されなかった。



第３図　指定地周辺の地質図

※　本図は，㈱長谷地質調査事務所（1980）発行の「北上川流域地質図」をもとに再構成しており，正確な地質境界を示すものではない。また，すべての要素を網羅しているわけではない。

２．南部氏の歴史

南部氏は，清和源氏の流れをくむ甲斐源氏の一族であり，武田氏，小笠原氏などと同族である。平安時代の末期に加賀美遠光の第３子光行が，甲斐国巨摩郡南部郷（山梨県南巨摩郡南部町）を領したことにより南部氏として発祥した。加賀美遠光と南部光行は源頼朝に仕え，文治５年（1189）の奥州合戦に従軍し，軍功により奥州糠部に所領を得たとされるがその事実はない。

なお，糠部は現在の岩手県北部から青森県東部に至る広大な地域で，鎌倉時代には北条得宗家の所領であったところである。

建武元年（1334），陸奥国司北畠顕家は，南部師行を糠部郡奉行として派遣した。師行とその弟政長は，糠部の八戸を拠点に活動し，南北朝の動乱期には，奥州における南朝方の要として重きをなした。南北朝合一から室町中期にかけて，師行，政長の子孫である八戸の根城南部氏（後の遠野南部氏）は糠部の代表的領主であり続けた。

このころ糠部には，一戸，三戸，七戸などにも南部氏の一族が存在し，ほかに浄法寺氏，九戸氏，久慈氏，四戸氏などの有力領主が存在していたが，戦国時代に入るとそれら南部氏一族の中から三戸南部氏が台頭し，南部晴政の代までには根城南部氏を凌ぐ勢力となった。

晴政は足利義晴から晴の一字を賜ったほか，岩手郡にも積極的に進出するなど，三戸南部氏の勢力拡大を図っている。一方九戸氏は，戦国時代に九戸から二戸に進出し，岩手郡の領主や，志和郡の斯波氏と深いつながりを持つなど，糠部では三戸南部氏と並び立つ存在となっていた。

天正 10 年（1582），三戸南部家の当主晴政と晴継が相次いで死去すると，一族の田子九郎信直が三戸南部家当主となった。しかし九戸氏や久慈氏，櫛引氏，七戸氏などは，信直の相続について不満をもち，以後，三戸の南部信直と対立を深めていった。

天正 14 年（1586）から同 16 年（1588）にかけて南部信直は岩手郡から志和郡に侵攻し，鎌倉時代以来の志和郡領主斯波氏を滅ぼした。この間，天正 15 年（1587）には，加賀の前田利家を介して豊臣秀吉に臣下の礼をとり，天正 18 年（1590）には，秀吉の小田原攻めに参陣し，南部七郡の領有を認められた。一方，津軽では大浦為信が反し，津軽，外ヶ浜，糠部の一部を占拠。為信の独立は，豊臣秀吉から認められることとなり，信直は津軽地方の領地を失うこととなった。また，天正 19 年（1591），九戸政実が南部信直に対し反乱を起こすと，秀吉の援軍を得て鎮圧，領内の一大勢力を駆逐した。

天正 20 年（1592）６月，諸城破却令に基づく『南部大膳大夫分国之内諸城破却共書上之事』といわれている文書によると，領内の 36 ヶ城は破却，存置した城館は居城の三戸城以下 12 城館あり，うち，岩手郡に属するものは唯一「不来方　平城　福士彦三郎持分」とされている。この城館が後の盛岡城となるのである。

信直はその後，居城として北上川流域の要衝に盛岡城の築城を図り，城下町の建設にも着手。慶長４年（1599）３月，ほぼ完成した盛岡城に入城したが，病気が悪化し同年 10 月５日 54 歳の生涯を終えた。

築城工事は嫡子利直（としなお）に引継がれ，信直卒去に伴う中断の後，慶長８年（1603）頃から再び普請がおこなわれた。しかし，冬季には作業ができず，度重なる水害にみまわれるなど遅々として工事は進捗しなかったが，寛永 10 年（1633）の第３代藩主の南部重直（しげなお）の代に一応の完成をみることとなり，以来盛岡藩 10 万石の居城となった。

寛文４年（1664 年），重直は，跡継ぎを定めないまま江戸で死去。幕府は裁定として，２万石減封した上で盛岡８万石を弟の重信（しげのぶ）に与えて継がせ，同じく弟の直房に新規に八戸２万石を与えて家を興させ，分割相続がおこなわれ，藩は存続した。

文化５年（1808）には，幕府によって領地加増を伴わない（収入の増加が全く伴わない）20 万石への高直し（文化の高直り）が行われ藩の格式は高くなった。しかし， 蝦夷地（現在の北海道）警衛など，より多くの兵力準備と動員が義務づけられ，盛岡藩の財政は慢性的な赤字体質となり破綻寸前まで追い詰められた。藩財政の破綻はそのまま領民への重い負担へと変わり，度重なる凶作も追い討ちをかけ，多くの一揆として現れた。

慶応４年（1868） ７月，盛岡藩は奥羽越列藩同盟を支持するため，同盟を脱退した秋田藩へ侵攻した。戦況は当初こそ盛岡藩側に優位であったが，佐賀藩を中心とした新政府軍の加勢のために敗戦を重ね， ９月 25 日に降伏した。

明治元年（1868）12 月，南部利恭（としゆき）は第 16 代盛岡藩藩主となり，盛岡から白石 13 万石への転封を命じられるが，翌年には 70 万両献金を条件に盛岡に復帰した。しかし，藩の財政状況はもはやどうにもならず，明治３年（1870），諸藩に先立ち版籍を奉還した。

表1　歴代盛岡藩主一覧

藩主	南部氏代世	実名	職称別号	廉中	実父	誕生	家督	治国(年)	薨年	薨日	法号	薨所	墓所
1	26	信直（のぶなお）	大膳大夫信徳大明神	彦三郎晴政長女	石川左衛門尉高信長男	天文15年3月（1546）	天正10年1月（1582）	15	55	慶長4年10月5日	常住院殿光録大夫江山心会	三戸城	三戸聖寿寺
2	27	利直（としなお）	信濃守	蒲生氏郷義妹	信直長男	天正4年3月15日（1576）	慶長4年12月（1599）	35	57	寛永9年8月18日（1632）	南宗院殿	三戸城	東禅寺
3	28	重直（しげなお）	山城守	加藤式部大輔明成女のち離縁	利直三男	慶長11年3月9日（1606）	寛文4年10月1日（1664）	32	59	寛文4年9月12日（1664）	即性院殿	桜田江戸邸	聖寿寺
4	29	重信（しげのぶ）	大膳大夫西卒・信行	玉山氏秀久女	利直五男	元和2年5月15日（1616）	寛文4年12月6日（1664）	28	87	元禄15年6月18日（1702）	大源院殿	麻布江戸邸	聖寿寺
5	30	行信（ゆきのぶ）	信濃守南英・信真	毛利刑部少輔元知女清浄院	重信三男	寛永19年8月17日（1642）	元禄5年6月27日（1692）	10	61	元禄15年10月11日（1702）	徳雲院殿	御新丸	聖寿寺
6	31	信恩（のぶおき）	備後守時修斎	毛利甲斐守綱元女真寿院	行信五男	延宝6年9月22日（1678）	元禄5年11月27日（1702）	5	30	宝永4年12月8日（1707）	霊巌院殿	御新丸	聖寿寺
7	32	利幹（としもと）	大膳亮自適斎・楽養軒	蜂須賀飛騨守守氏女仙桂院	行信十一男	元禄2年閏正月20日（1689）	享保10年6月4日（1725）	18	37	享保10年6月4日（1725）	霊徳院殿	御新丸	聖寿寺
8	33	利視（としみ）	大膳大夫徳洲・壺雲斎	榊原式部大輔政那女本性院	信恩三男	宝永5年4月26日（1708）	享保10年7月21日（1725）	36	45	宝暦2年3月28日（1752）	天量院殿	御城奥	聖寿寺
9	34	利雄（としかつ）	大膳大夫万里・膳鶴霑智江	松平加賀守吉徳女玉台院	利幹長男	享保10年6月11日（1725）	宝暦2年5月25日（1752）	27	55	安永8年12月5日（1779）	養源院殿	御城奥	聖寿寺
10	35	利正（としまさ）	大膳大夫玉集庵・沾蘭	南部彦九郎信起女観光院	利視八男	宝暦2年3月9日（1752）	安永9年2月7日（1780）	5	33	天明4年5月5日（1784）	義徳院殿	桜田江戸邸	東禅寺
11	36	利敬（としたか）	大膳大夫	松平安藝守重晟女光樹院	利正二男	天明2年9月29日（1782）	天明4年7月17日（1784）	37	39	文政3年6月15日（1820）	神鼎院殿	御城奥	聖寿寺
12	37	利用（としもち）（先）	吉次郎		三戸主計信丞子	文化4年12月19日（1807）		1	15	文政4年8月21日（1821）	常孝院殿	江戸	聖寿寺
		利用（としもち）（後）	大膳大夫華陽・字厚	松平加賀守斎広卿女のち離縁	三戸左近信丞	享和3年11月6日（1803）	文政4年10月（1821）	4	23	文政8年7月18日（1825）	養徳院殿	桜田江戸邸	東禅寺
13	38	利済（としたか）	信濃守堂子・彦静勝軒・舞鶴亭	松平右京大夫輝延女利敬養女のち利用養妹雅姫君	利謹長男	寛政9年8月29日（1797）	文政8年9月23日（1825）	23	59	安政2年4月14日（1855）	霊承院殿	麻布江戸邸	聖寿寺
14	39	利義（としよし）	甲斐守松堂・楽堂	井伊掃部頭真亮養女実利用女法雲院	利済長男	文政6年12月（1823）	嘉永元年6月27日（1848）	1	66	明治21年8月21日（1888）	—	盛岡	東禅寺
15	40	利剛（としひさ）	美濃守和・致道・中節斎・万春堂	水戸中納言慶篤卿妹松姫君	利済三男	文政9年12月28日（1826）	嘉永2年10月25日（1849）	20	71	明治29年11月2日（1896）	—	東京富士見邸	東京護国寺
16	41	利恭（としゆき）	甲斐守納斎	候爵浅野悉照女	利剛長男	安政2年10月9日（1855）	明治元年12月17日（1868）	2	49	明治36年10月19日（1903）	—	東京富士見邸	東京護国寺

表２　盛岡城関連年表

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
	文治５	1189		奥州合戦，源頼朝が平泉藤原氏を滅ぼす，工藤行光岩手郡地頭となる	①
	元弘３	1333		鎌倉幕府滅ぶ	
	建武元	1334		北畠顕家陸奥国司となる，南部師行糠部に入る	
不来方城１期	元中９（明徳３）	1392		南北朝合一 南部薩摩守政光，八戸の根城に入る	②
	応永11	1404		南部大膳（義政），福士親行・秀行に不来方を任せる	③
	永享7	1435		和賀・稗貫の大乱，南部遠州等北奥勢が不来方城より出陣（翌年まで）	④
不来方城２期	天文８	1539		南部晴政，足利義晴より「晴」の一字を拝領。聖壽寺館大火	⑤⑥
	天正10	1582		田子信直，三戸南部を継ぐ	⑦ほか
	天正16	1588		南部信直，斯波氏を滅ぼす	
	天正18	1590		信直，前田利家軍に属し，小田原に参陣 豊臣秀吉，信直に本領安堵の朱印状を交付	⑦⑧
	天正19	1591	信直	九戸合戦，浅野長政らから「不来方」の地へ築城の勧奨を得る	⑥⑨
	天正20（文禄元）	1592		南部信直，肥前名護屋に出陣 南部氏領内の城割，不来方城ほか12城を存置し，厨川城・乙部城ほか破却	⑩
	文禄２	1593		福士氏，鵜飼（滝沢村）に移転	③
盛岡城１期	慶長３	1598		秀吉の京都醍醐の観桜会直後に，信直築城許可を得て築城開始（慶長２年築城開始との説もあり）	⑪
	慶長４	1599		築城ほぼ成り，信直入城	
				10月５日，信直，福岡城にて死去	
	慶長４	1599	利直	12月，利直，家督相続	
	慶長５	1600		関ヶ原の合戦 南部利直，徳川家康の命により，最上で上杉勢と対陣	
				盛岡城普請一応の完成	
	慶長８	1603		盛岡城修理	
	慶長13	1608		城下町並の整備一応成る	
	慶長14	1609		10月中津川に上ノ橋をかけ，青銅擬宝珠20個を取り付ける 造営大奉行七戸隼人正直時	⑫
	慶長16	1611		中津川に中ノ橋をかけ，青銅擬宝珠20個を取り付ける 普請奉行田代治兵衛	
	慶長17	1612		９月中津川に下ノ橋をかける 普請奉行波岡八左衛門	
	元和元	1615		大坂夏の陣，豊臣家滅ぶ 利直，家康よりカンボジアの虎を拝領	
				６月盛岡侍屋敷町割始まる	
				利直，志和の郡山城に移る	
盛岡城２期	元和３	1617		野田掃部を森ヶ岡城代として大修築（２期工事開始）	⑬⑭
				諸士町整備成る	
				三戸より庶民を盛岡に移し，三戸町とする	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　事	出典等
盛岡城２期	元和５	1619	利直	盛岡城修築成り，南部利直が福岡城より移る	⑭
	寛永元	1624		処刑した切支丹を城内の虎の檻に入れる	⑮ほか
	寛永３	1626		利直，日詰の郡山城を居城とす	
	寛永４	1627		新御蔵を城内から内丸に引移す	
	寛永９	1632		８月18日，利直死去	
	寛永９	1632	重直	10月，重直，家督相続	
	寛永10	1633		南部重直盛岡城に入城 以後，藩主居城となる	
	寛永11	1634		この年，盛岡城炎上（寛永10，13年の説あり）	
	寛永13	1636		夏，本丸仮普請中に落雷し炎上する（寛永10年，11年の説あり） 福岡城の古材で外曲輪に御新丸を普請し，仮御殿とする	⑯
				盛岡城再造営	
	寛永18	1641		御新丸普請出来	
	慶安元	1648		７月21日，時鐘こわれる	
				９月25日，時鐘出来上がる	
	承応２	1653		閏６月29日，城内八幡神社を築立したところ烏帽子岩出る	
	明暦２	1656		夕顔瀬橋架設	
	万治２	1659		本丸三重櫓鯱鋳造のため，京都の釜師小泉仁佐衛門を召抱える	
				広小路できる	
	寛文２	1662		９月盛岡近在大洪水で中津川３橋落ちる	
	寛文３	1663		中ノ丸，太鼓堂もともに焼亡	
	寛文４	1664		９月12日，重直死去	
	寛文４	1664	重信	12月６日，重信，家督相続	
	寛文５	1665		３月１日，山口三右衛門を瓦焼奉行に仰付	
				郡山城をこわす	
				３月26日，御新丸の居間前の石垣構築	⑰
	寛文7	1667		６月６日，三ノ丸冠木門石垣，二ノ丸石垣の普請が許可される	⑱
				８月15日，城普請入用の石垣石材を志和郡長岡より船で召上げる	⑰
				11月15日，この年の石垣普請を終了する	
盛岡城３期	寛文８	1668		１月21日，石垣普請着工（再開）	⑰
				６月14日，石垣普請完成	
				４月26日，御本丸普請成就	
				６月14日，御成石垣普請なる	
				６月26日，御田屋清水御堀の橋普請出来る	
	寛文９	1669		７月５日，鳩御門の建直し及び外石垣普請実施	⑰⑲
				11月５日，重信が建直しの完了した鳩御門を通る	
	寛文10	1670		６月３日，大洪水中津川３橋及び夕顔瀬橋流失	
	寛文12	1672		淡路丸御蔵普請	
	寛文13 （延宝元）	1673		５月21日，舟入場の石垣修復，先年焼失の本丸三重櫓，二階櫓の再建について許可となる	⑳

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　事	出典等
盛岡城３期	寛文13（延宝元）	1673	重信	北上古川舟付木戸新規に建立	
				７月１日，北上川新川の開削普請始まる	
	延宝２	1674		３月21日，盛岡城三階櫓工事着手 奉行，野田弥右エ門・松尾安左エ門	
				４月20日，本丸三重櫓，二階櫓再建にあたり，「瀬戸瓦」を発注	⑰
				４月，中津川三橋普請出来る	
				中津川北上川新土手できる	
				７月17日，本丸二階櫓工事着手	
				８月28日，新山橋できる	
	延宝３	1675		本丸二階櫓再建，北上川の開削工事完成	⑲
	延宝４	1676		６月29日，本丸三階櫓棟上	
				９月１日，城廻りの堀端に桜垣建直し仰付	
	延宝５	1677		10月17日，中津川普請出来る	
	延宝６	1678		御勘定場新築（二ノ丸）	
				10月15日，郡山御殿取毀の材木にて盛岡城内御末方普請	
	延宝７	1679		三戸土手裏に時鐘を設ける 城内の時太鼓停止	
				７月10日，二ノ丸西方の土手長さ100間余，新規に石垣を築くこと，腰曲輪，三ノ丸に二階蔵を建てること，三ノ丸石垣の修復等が許可される	⑰
				11月24日，石垣破損修す	⑰
	延宝８	1680		２月１日，石垣石材を外曲輪（現在の内丸）石間，八戸屋敷，斗米（とっこべ）石（中ノ橋通）から切り出す	⑰
				３月８日，本丸石垣築仰出	
				５月８日，徳川家綱死去により普請中断	
				９月４日，二階蔵三箇所建替え及び石垣補修完成	
				10月21日，再び城内石垣普請方幕府より許可	⑰
	延宝９	1681		２月９日，本丸石垣築懸	
	天和元	1681		６月27日，斗米鐘楼十三日町裏へ移す	
	天和２	1682		２月29日，普請中の本丸二階下，吹上門北側の石垣20間余が崩れる	⑰
				４月29日，同上石垣普請許可	
				上ノ橋の架け替え	
				８月25日，本丸西側の石垣補修仰付け	⑰
				８月29日，本丸石垣の修理着手	
				11月22日，二ノ丸北側の石垣修理完了	
	天和３	1683		６月22日，新山舟渡土橋被仰渡	
	貞享２	1685		大手より東方川端の土手崩れる	
	貞享３	1686		３月，二ノ丸西側の石垣完成（７年間かかる） 石垣奉行　奥寺八左衛門・野田弥右衛門	二ノ丸西面
				８月12日，大手門筋土手崩れの築直し幕府より許可	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城３期	元禄３	1690	重信	８月９日，新山土橋渡初め	
	元禄４	1691		７月24日，三ノ丸側惣堀繕う	
	元禄５	1692	行信	７月27日，行信，家督相続	
	元禄13	1700		城内の焔硝蔵を愛宕山に移す	
	元禄15	1702		６月18日，重信死去	
				10月11日，行信死去	
	元禄15	1702	信恩	11月27日，信恩，家督相続	
	元禄16	1703		幕府に対し，本丸・二ノ丸・三ノ丸等の石垣11箇所の補修を願い出る	⑰
				９月29日，普請願が許可される	
	元禄17	1704		１月２日，大地震により本丸の壁と石垣が崩れ，破損したため，藩主・諸役人共々御新丸に移る	
				４月５日，孕んでいる箇所の石垣普請を野田弥右衛門・川守田弥五兵衛に指示	⑲
盛岡城４期	宝永元	1704		４月21日，鶴姫死去により石垣普請取り止め	⑲
				７月25日，石垣根石設置をするよう指示	⑰
				12月10日，石垣普請完了	
	宝永２	1705		３月13日，石垣修理を雪が消えるまでの間休止とする	⑰⑲
				５月１日，二階櫓・車門・石垣修復について，幕府に願い出る	
				三ノ丸瓦門北石垣修復	⑰⑲
				７月１日，幕府に対し，二階櫓・鳩御門ほか修理願出る	
				９月２日，三ノ丸北側石垣修復工事完成	㉑
				11月22日，車御門の石垣修理一部完成 残りは来春に着工するよう指示	⑰⑲
	宝永３	1706		３月３日，本丸石垣の修繕のため，御廊下，御二階取り壊し	
				３月22日，廊下橋・三ノ丸たたみ立て直し指示	
				８月12日，幕府に対し，絵図を持って石垣普請の説明をおこなう	
	宝永４	1707		２月12日，本町裏の堀の中にある石を石垣に使用するよう指示	
				２月19日，石垣及び御二階普請に着手	⑲
				３月，本丸二階櫓石垣修復の石材を，本町裏の堀から採取	⑰⑲
				３月19日，石垣並びに二階櫓の普請取付け	
				９月13日，城内の柵建直しの普請を仰付けたが，当年不作のため，石垣普請を停止	
				12月８日，信恩死去	
	宝永５	1708	利幹	閏正月５日，利幹，家督相続	
				１月24日，大風，北御櫓鯱吹き落ちて所々損す	
	宝永６	1709		御新丸に能舞台造立	
				７月４日，三階櫓鯱棟上	
	享保元	1716		内丸屋敷萱葺の処柾葺被仰出	
	享保４	1719		１月10日，本丸御末より出火	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　事	出典等
盛岡城４期	享保４	1719	利幹	１月12日，馬屋普請出来	
	享保10	1725		６月４日，利幹死去	
	享保10	1725	利視	７月21日，利視，家督相続	
	享保15	1730		榊山曲輪に榊山正一位稲荷大明神を崇め，藩内の総鎮守とする	
	享保18	1733		11月10日，御城内（三ノ丸）太鼓堂に太鼓を釣り上げ， 寛文以降停止のものを再建	
	元文２	1737		10月16日，紙丁橋普請出来	
	元文５	1740		１月11日，幕府に対し石垣修復を申し出る	⑰
				本丸西北石垣・二ノ丸乾之方石垣修補許可される	⑰
				３月20日，城内石垣普請奉行御者頭石川助左衛門を仰付る	
				腰曲輪石垣にハバキ石垣を取り付け，崩落を防ぐ 石材は日蔭山より採取（二ノ丸東側を含めて延享年間まで施工）	⑲
				６月15日，石垣普請を仰付	⑰
				７月23日，新御蔵完成	
				本丸三階櫓の瓦葺修理の普請に取り掛かる	
				９月１日，御中丸から大沢川原方の石垣修理着手	⑰
	寛保２	1742		９月19日，中ノ橋架け替え出来渡り初め	
				11月21日，淡路丸の石垣普請で使用する石材を雪のあるうちに運搬しておくよう指示	⑰
	寛保３	1743		本丸三重櫓修復，10月１日に完成	
	寛保４	1744		腰曲輪南面石垣補修工事中断	
	延享元	1744		２月10日，石合御蔵完成	
				５月，本御蔵普請	
				この年，惣御門惣柵建替	
	延享４	1747		12月18日，腰曲輪南面の石垣補修，ハバキ石垣設置完了	⑰
	寛延２	1749		７月５日，彦御蔵が完成する	
				９月22日，城内淡路丸に信直の神位を勧請・淡路大明神造立	
	宝暦２	1752		３月28日，利視死去	
	宝暦２	1752	利雄	５月22日，利雄，家督相続	
	宝暦３	1753		６月18日，御本丸百足橋下菜園入口の柳木に落雷す	
				９月５日，城内に雷堂を造立鎮座	
	宝暦12	1762		７月19日，綱御門修復仰付	
				中丸御門内の番所，大工小屋前門を建て，瓦葺とする	
				８月11日，下ノ橋普請出来る	
				９月，夕顔瀬橋の下流土手を新築	
	宝暦13	1763		８月22日，御鷹部屋前の塀側大腰掛新規普請	
	明和元	1764		５月16日，城内外の惣塀並びに木御繕普請	
	明和元	1764		10月４日，城内淡路丸桜山御宮修復	
	明和３	1766		10月29日，中丸玄関前から車御門まで切石普請	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　事	出典等
盛岡城４期	明和３	1766	利雄	この年，下ノ橋御門新規建直し	
				11月10日，綱御門建替普請	
盛岡城５期	明和７	1770		７月７日，紙丁橋架け替え	
	明和８	1771		御三階櫓を改修	
	安永元	1772		５月３日，地震により石垣孕み２箇所	
	安永２	1773		百足橋下に二間・三間の土蔵を造る	
	安永６	1777		６月21日，綱御門脇から大納戸所後の柵を修理	
				９月，御新丸御門・塀・屋根大破につき修理	
	安永７	1778		４月22日，城内石垣の普請修補許可	
	安永８	1779		７月22日，城内石垣所々孕み出て，その修理許可となる	
				10月，中ノ橋架け替え。下ノ橋普請	
				12月５日，利雄死去	
	安永９	1780	利正	２月７日，利正，家督相続	
	天明２	1782		３月，御新丸建物の塀を修理	
				６月20日，上ノ橋新規架け替え	
	天明３	1783		盛岡城下仁王厩を城内の桜馬場に移す	
	天明４	1784		５月５日，利正死去	
	天明４	1784	利敬	７月17日，利敬，家督相続	
	天明５	1785		８月24日，大雨風のため綱御門倒壊	
	天明６	1786		御勘定所を建て替え	
	天明７	1787		９月，御新丸普請成就	
	天明８	1788		10月29日，綱御門普請出来て上棟する	
	寛政６	1794		５月15日，勘定所新規建替	
				６月16日，中ノ橋普請（10月17日出来）	
	寛政７	1795		明神曲輪の石垣普請ができる	
	寛政11	1799		５月14日，下ノ橋普請	
				７月６日，車御門屋根瓦損じ普請	
				御三階並びに石垣普請	
	寛政12	1800		３月６日，二ノ丸諸役所の住居替仰出 御目付所前に土蔵建て「御留蔵」とする	
				10月，大手先の外堀二箇所埋まり，復旧を老中より許可される	㉒
				10月15日，城外の外塀修補	
	享和２	1802		御新丸新規に普請できる	
	享和４	1804		８月12日，上ノ橋架け替え完成	
	文化５	1808		２月25日，御末御門のことを御本丸御門と改称する	
	文化７	1810		９月29日，盛岡城本御蔵二番三番新規建替え	
	文化９	1812		淡路丸大明神を桜山神社と改める 腰曲輪に桜馬場を設ける	
	文化13	1816		６月，城内諸役所の名改める	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　事	出典等
盛岡城５期	文政２	1819	利敬	５月，城内榊山御本社棟上	
	文政３	1820		６月15日利敬死去	
	文政４	1821	利用	７月９日，鳩森曲輪土塀大雨で崩れる	
				８月21日利用（先）死去	
				10月，利用（後），家督相続	
	文政６	1823		９月７日，暁御台所前御蔵一箇所焼失	
	文政８	1825		７月18日，利用（後）死去	
	文政８	1825	利済	９月23日，利済，家督相続	
	文政12	1829		５月，広小路屋敷普請始まる	
	文政13	1830		広小路御殿を新たに造営 御菜園も造営し，泉水庭園に曲水の茶屋，万歳橋などを建てる 稲荷堂・雷神社も再建 八幡社を建てて，三武社と号する	
	天保元	1830		５月，中ノ橋架け替え	
				９月27日，広小路御殿棟上	
	天保５	1834		10月20日，本丸庭に式舞台普請仰出	
	天保７	1836		11月１日，寅刻城内御小納戸預かりの彦御蔵焼失	
	天保13	1842		３月17日，本丸三重櫓を「天守」と改める	
				４月24日，下御殿を以後清水御殿と唱えるよう仰出	
	天保14	1843		８月30日，清水御殿の大工小屋焼失	
	弘化元	1844		５月３日，外三御門に見張番所建つ	
				11月，城内毘沙門渕朝日渓に湧泉あり御茶水とする	
				11月４日，城内鳩森曲輪鹿島篭堂焼失	
	弘化２	1845		３月24日，城内上り口普請仰出	
	弘化３	1846		６月20日，車御門普請完成	
	弘化４	1847		本丸の表居間を改築 本丸中庭に舞台が設けられる	
	嘉永元	1848	利義	６月27日，利義，家督相続	
	嘉永２	1849	利剛	10月25日，利剛，家督相続	
	嘉永３	1850		中ノ橋普請	
	嘉永４	1851		御菜園の普請すべて成就	
	嘉永５	1852		三ノ丸鳩森下石垣普請	
	安政元	1854		本丸御殿の不要な部分を整理し始める 鳩森下曲輪石垣の修復がおこなわれる 正長楼三階・孔雀之間・海老之間・中二階廊下・杜若之間・蔦之間・車寄などを取り壊す	
	安政２	1855		冠木御門番所の脇並びに大手門脇の石垣普請	
				４月14日，利済死去	
	文久２	1862		本丸天守櫓の普請できる	
	明治元	1868		９月25日，戊辰戦争で盛岡藩降伏する	
	明治元	1868	利恭	12月17日，利恭，家督相続	
	明治２	1869		７月，盛岡藩庁を城内に置く	

変遷区分	年号	西暦	藩主	記　　事	出典等
盛岡城５期	明治２	1869	利恭	10月15日，城内惣神社他所に移す	
	明治３	1870		７月，廃藩置県により盛岡県となる	
				８月，盛岡県庁を城内に置く	
	明治４	1871		県庁を仁王村広小路の藩主別邸に移す	
	明治５	1872		城域すべて陸軍省用地となる	
	明治７	1874		城内建物を入札により払い下げ，取り壊し	

※出典等一覧

①『吾妻鏡』
②『八戸家伝記』
③『福士系図』
④『稗貫状』
⑤『大館日記』
⑥『祐清私記』
⑦『南部根源記』
⑧『豊臣秀吉朱印状』
⑨『旧記』
⑩『南部諸城破却書上』
⑪『信直書状』
⑫『青銅擬宝珠銘』
⑬『藩史草稿』
⑭『郷村古実見聞記』
⑮『バジェスの582章』
⑯『盛岡城図（金沢）「御新丸図』
⑰『御城廻御修補』
⑱『老中奉書返書』
⑲『盛岡藩家老席日記雑書』
⑳『幕府老中奉書』
㉑『石垣普請奉行刻銘』
㉒『盛岡城大手先御堀浚御願』

３．盛岡城の概要

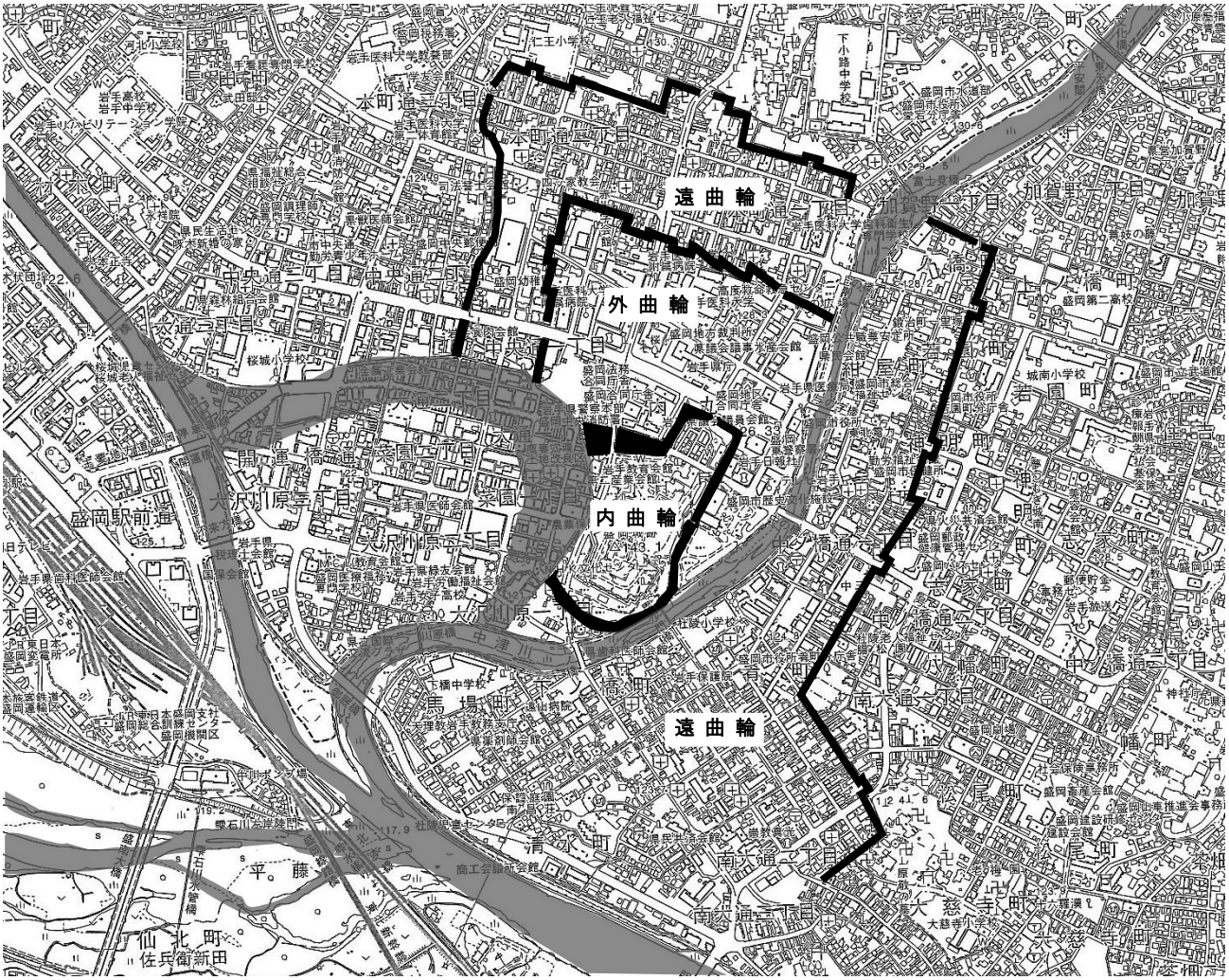
（１）城郭の構成

盛岡城の基本構成は，内曲輪（御城内）を旧北上川と中津川の合流点に突出した小丘陵に配置し，内曲輪の北側を囲むように水堀を巡らせ，南部氏一族や盛岡藩の重臣たちの屋敷が存在した外曲輪を設けている。さらに外側に一条の塁濠（るいごう）を巡らし，外曲輪を囲むように東側の中津川対岸を含んだ地域に遠曲輪（総構え）を配置，内曲輪を要とする梯郭式（ていかくしき）の縄張を呈している。

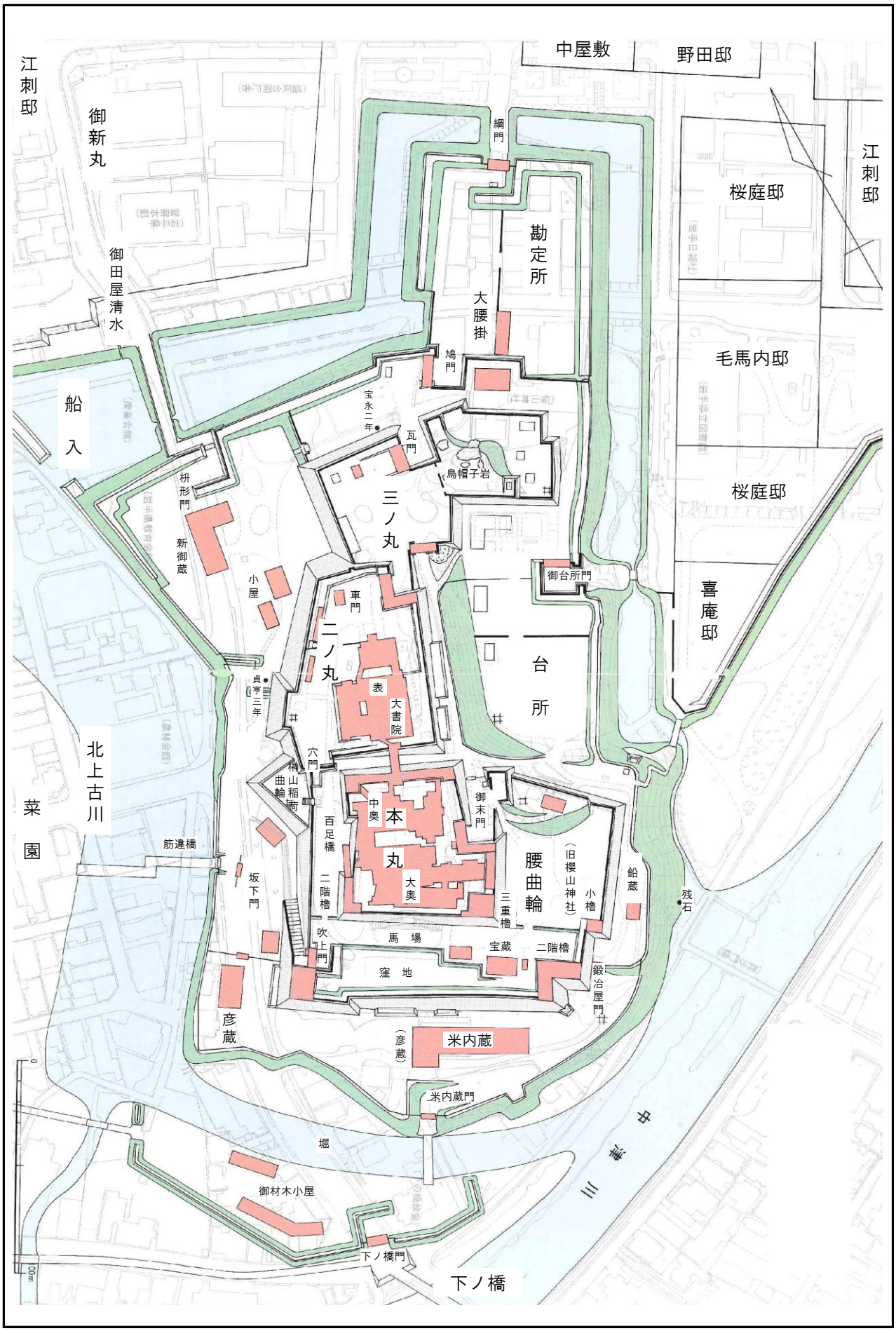
遠曲輪の内外は町人や諸士の屋敷地となっており，曲輪の縁辺には惣門（そうもん）が設けられていた。また，城下から諸街道への出口には枡形（ますがた）が設けられ，その内側に組丁と呼ばれる足軽（同心）の屋敷地が配置されており，出入りを管理していた。

内曲輪に関しては，本丸・二ノ丸・三ノ丸・腰曲輪・下曲輪などから構成され，丘陵南側の頂部に配置された本丸から，二ノ丸・三ノ丸と段下がりに連なる連郭式（れんかくしき）の縄張を呈している。

これまでおこなわれた発掘調査の結果，内曲輪の本丸・二ノ丸・腰曲輪において中世から近世を通じて多くの遺構面が確認され，福士氏の不来方城から，南部氏の盛岡城とその終末までの大まかな変遷が判明した。



第４図　盛岡城の縄張（概念図）



第５図　城内（内曲輪）の建物配置復元図（江戸時代後期）

※盛岡市・盛岡市教育委員会「盛岡城」（1998）発行を編集

（２）遺構の変遷（22 頁第６図，23 頁第７図）

不来方城期（14 世紀末～16 世紀）

室町時代（14 世紀末～15 世紀）から戦国時代（16 世紀）にかけて，福士氏の居城（淡路館・慶善館）が存在した時期である。曲輪は丘陵の頂部から裾に至る自然地形に合わせた形で縄張されている。

後の盛岡城の本丸を主郭とし，二ノ丸・三ノ丸の前身となる曲輪が丘陵頂部に連なり，それぞれ堀切で区画されていた。また，腰曲輪は狭長な曲輪が雛段状に造成され，主郭を囲んでいた。不来方城１期には丘陵の上部中心に構築され，２ａ～２ｂ期に規模が拡大され，丘陵裾部まで堀や土塁が構えられる。

盛岡城１期（16 世紀末～17 世紀前葉）

盛岡南部氏による築城がおこなわれた慶長年間（16 世紀末～17 世紀初頭）に相当する。本丸と二ノ丸の西面を除く箇所，及び主要な城門のある虎口（こぐち）にのみ石垣が構築される。この時期の石垣様式は野面（のづら）石を多用した乱積Ａである。

腰曲輪は大規模な盛土造成をおこない，曲輪を一つの広く大きなものにまとめている。縁辺には木柵を巡らせ，屈曲した横矢掛（よこやが）けの構造をとっており，地形に合わせた縄張の中にも，近世的な築城意識が読み取れる。

盛岡城２期（17 世紀前葉～17 世紀後葉）

元和３年（1617）の大改修にはじまる。本丸においては構造を拡張し，二ノ丸においては石垣修復がなされている。また，三ノ丸と腰曲輪にも石垣が構築される。内曲輪を総石垣化に向けて，整備から完成へと進められた時期である。

石垣様式は不定形な割石が使用された乱積Ｂであり，内曲輪のほとんどに石垣が構築され，近世城郭として一応の完成を見た時期といえる。

盛岡城３期（17 世紀後葉～18 世紀前葉）

寛文８年（1668）から延宝４年（1676）にかけて三重櫓・二階櫓を含めた本丸再建が進められる。これと連動して，内曲輪西面に直面していた北上川の川筋が切り替えられる。その後延宝８年（1680）から貞享３年（1686）の７年間の歳月をかけて，腰曲輪西面から二ノ丸西面までの石垣が構築される。石垣は控えの長い規格材を使用した布積Ａである。

盛岡城４期（18 世紀前葉～18 世紀中葉）

宝永元年（1704）からの震災復旧から始まる。本丸西側，二ノ丸北東部，腰曲輪西の石垣が積直されている。また，元文５年（1740）から延享５年（1748）にかけて，腰曲輪南側石垣や

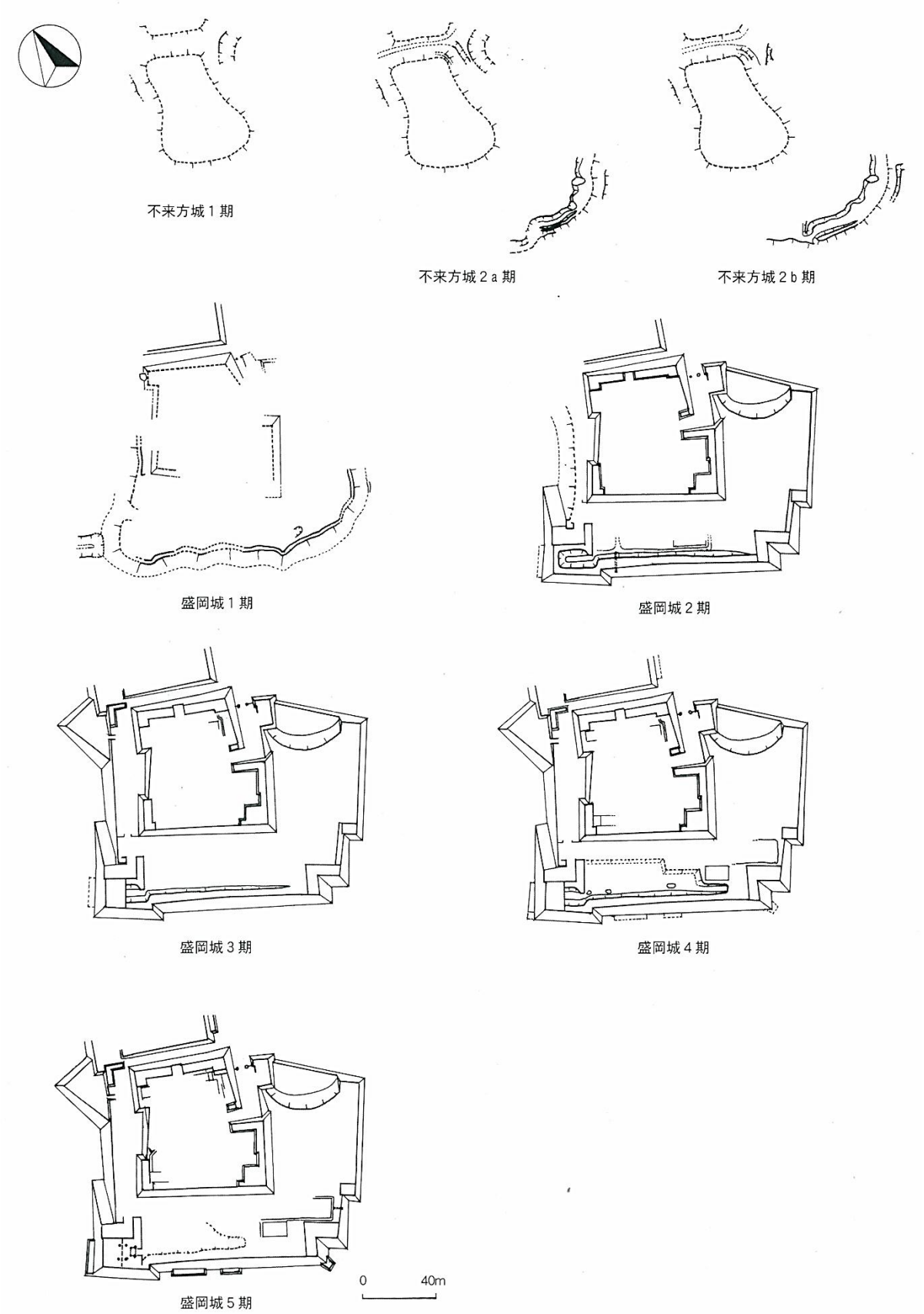
二ノ丸東石垣の孕(はら)み出しの応急処置として，補修石垣（ハバキ石垣）が構築された。

盛岡城５期（18 世紀後葉～19 世紀中葉）

18 世紀後葉から明治７年（1874）の破却までの期間である。腰曲輪の窪地は埋立てられ，南西隅櫓が廃止されて吹上三社(ふきあげさんしゃ)の神域となるほか，城内の排水施設が整備され，本丸御殿の一部が本丸西側に張り出すように構築されていた。

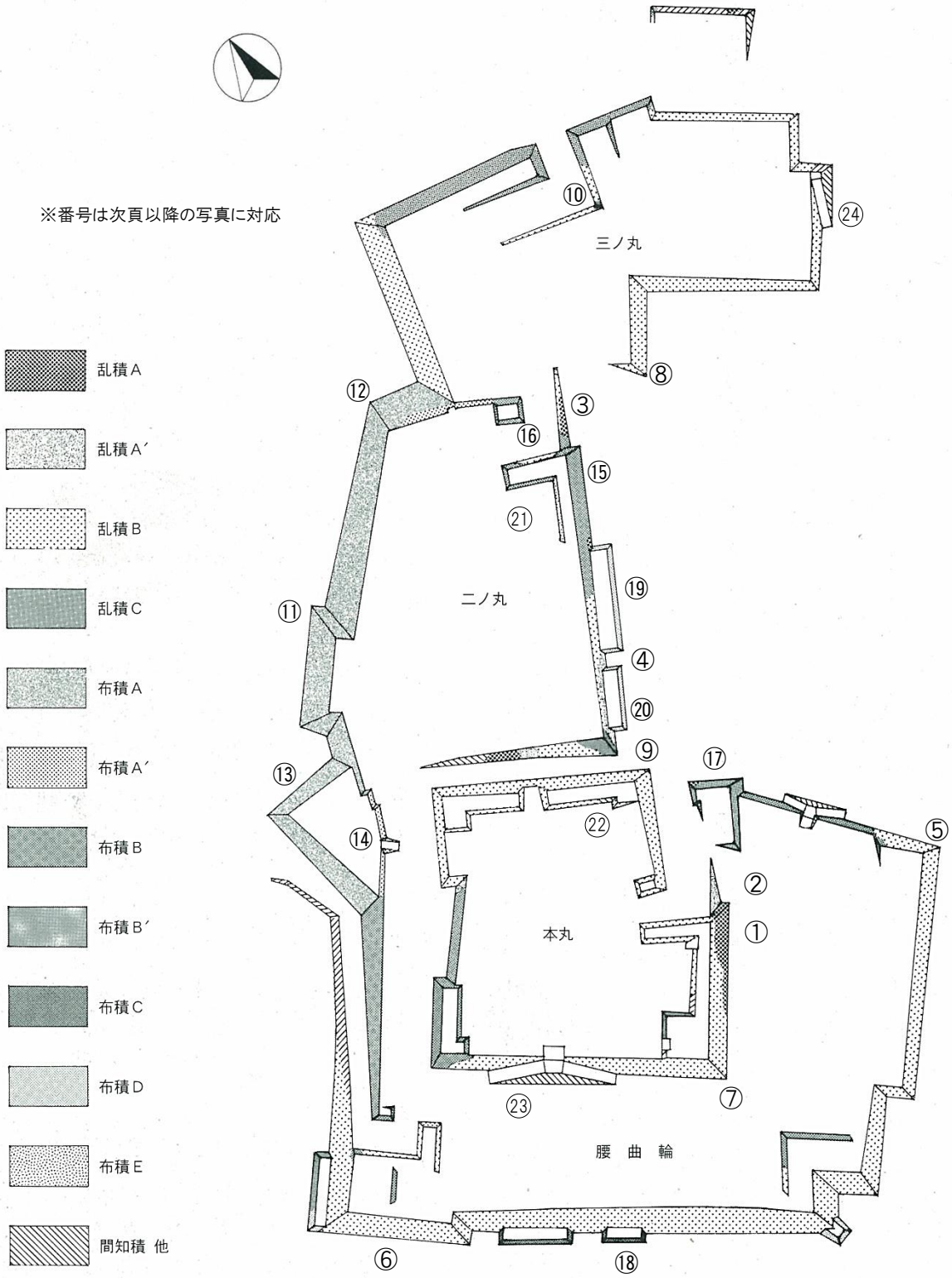
表３　遺構と石垣様式の変遷

時　期			年　代	概　　要
不来方城期	①	不来方城 1 期	14 世紀末頃～	丘陵の頂部から中腹にかけて城郭が築かれる。
	②	不来方城 2 a 期	15 世紀末 ～16 世紀前半	丘陵裾部まで拡大される。後の本丸・二ノ丸・三ノ丸・腰曲輪の前身的曲輪が存在した。
		不来方城 2 b 期	16 世紀後半	本丸付近の堀改修 腰曲輪の嵩上げ
盛岡城期	④	盛岡城 1 期	16 世紀終末 （慶長３年：1598）～	不来方城を大改修。本丸，二ノ丸，城内主要虎口に石垣が築かれる（乱積Ａ）。石垣は，角石に割石，築石に野面石を用いた乱積。腰曲輪の法面は土手のままで木柵が廻る。
	⑤	盛岡城 2 期	17 世紀前葉 （元和３年：1617）～	本丸，二ノ丸石垣の改修（本丸の拡張）。城の西側を除き，腰曲輪・三ノ丸に石垣が構築（乱積Ｂ）される。 石垣は築石に至るまで割石で乱積。建物に双鶴（向鶴）紋の瓦が葺かれる。寛永 13 年（1636）本丸の大半を焼失。
	⑥	盛岡城 3 期	17 世紀後葉 （寛文８年：1668）～	腰曲輪西側・二ノ丸西側・榊山曲輪の石垣が構築される（布積Ａ）。本丸再建本丸と腰曲輪など，主な櫓等に赤瓦が葺かれる。
	⑦	盛岡城 4 期	18 世紀前葉～中葉 （宝永元年：1704）～	本丸西側，二ノ丸北東部，腰曲輪西側などの石垣積直し（布積Ａ´・Ｂ）。 腰曲輪南と二ノ丸東にハバキ石垣構築（布積Ｃ・Ｄ，元文５：1737～）。 腰曲輪窪地の縮小
	⑧	盛岡城 5 期	18 世紀後葉 ～19 世紀中葉 （～明治７年：1874）	腰曲輪窪地の埋立て 腰曲輪南西隅櫓を廃止して吹上三社勧請 城内排水設備の整備 明治７年建物払い下げ，取り壊し



第６図　本丸・腰曲輪の遺構変遷

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第２期保存整備事業報告書-（2008.3）より転載



第７図　石垣の分類と範囲

※史跡盛岡城跡Ⅱ-第２期保存整備事業報告書-（2008.3）より転載

①乱積Ａ　本丸御末門南東側

②乱積Ａ　本丸御末門南東出隅

③乱積Ａ　三ノ丸不明門西側

④乱積Ａ´　二ノ丸東面石垣

⑤乱積Ｂ　腰曲輪北東隅

⑥乱積Ｂ　腰曲輪南西部（修復後）

⑦乱積Ｂ　本丸三重櫓台

⑧乱積Ｂ　三ノ丸不明門東石垣

写真　石垣の積み方（１）

⑨乱積Ｃ　二ノ丸南東部（隅部分）

⑩乱積Ｃ　三ノ丸瓦門南東部（入隅）

⑪布積Ａ　二ノ丸西側

⑫布積Ａ　二ノ丸北西部

⑬布積Ａ　榊山曲輪北面

⑭布積Ａ´　榊山曲輪東側

⑮布積Ｂ　二ノ丸北東隅

⑯布積Ｂ　二ノ丸車門

写真　石垣の積み方（２）

⑰布積Ｂ´　御乗物部屋

⑱布積Ｃ　腰曲輪ハバキ石垣（撤去前）

⑲布積Ｄ　二ノ丸東側ハバキ石垣

⑳布積Ｄ　二ノ丸東側ハバキ石垣

㉑布積Ｅ　二ノ丸北東部石土居

㉒布積Ｅ　本丸小納戸櫓台（撤去前）

㉓間知積　本丸南側

㉔間知積　三ノ丸東側

写真　石垣の積み方（３）

（３）石垣石材の産地と関連遺跡（28 頁表４，29 頁第８図）

盛岡周辺，北上川以東の地質は古生界に属し，頁岩（けつがん）や火山岩の岩相がみられるが，その中に花崗岩の貫入が見られる。個々の範囲は小規模で，数 100 メートル前後から数キロメートル程度である。盛岡城の立地する独立丘陵にも花崗岩風化土（マサ土）の中に大小の花崗岩転石があり，中津川河川敷にも花崗岩をみることができる。

盛岡城の石材は，内曲輪のある丘陵から産する石材も使用しており，城内には矢穴をあけながら切り出されていない転石も残されている。しかし，石垣に使用するに足る量ではなく，周辺域から切り出しをおこなっている。その産地を関連遺跡及び伝承地も含め表４及び第８図にまとめた。

石材は，石切丁場（いしきりちょうば）である程度加工し，規格材にしてから運ばれたものと考えられ，『御城廻（おしろまわり）御修補（おんしゅうほ）』には「八木橋茂兵衛其外石切共相尋候処前々御普請之節面弐尺四方扣四尺ニ切立申由得共此度者五寸相増遂吟味候処石壱ツニ付六百三十文宛ニテ割出可申旨書付差出候間右之通申付・・・」と書かれている。

運搬方法については，『盛岡藩家老席日記雑書』の寛保２年（1742）11 月 21 日の条には「只今雪之内御城内へ引入申度旨申出候付，伺之通被　仰付，御目付へ申渡之」とあり，日蔭山（ひかげやま）石切丁場からの石材は，冬季間に橇（そり）で運搬したことがうかがえる。また，紫波郡紫波町長岡からの運搬については，『盛岡藩家老席日記雑書』の寛文７年（1667）８月 15 日の条に「盛岡御城御御普請御入用之石，志和郡之内長岡より船ニて御賦候」とあり，北上川を船で遡上する方法で運搬されたようである。

石材の産地のうち盛岡城外曲輪に相当する範囲については，『盛岡藩家老席日記雑書』の宝永３年（1706）８月 30 日の条に，「御在所御城御修覆（復）之儀，先達て御伺被成候付，其刻及奉書候，段々御修覆（復）被成候処，石不足付外側之堀ニ有之石御遣被成度之由，委細以絵図被仰聞致承知候・・・」とあり，宝永４年（1707）２月 12 日の条には「御城石垣御普請御用本町裏御堀之内之石為取申度旨，野田半左衛門申出候付，石引出候通，本町御町之者馬屋破為賦候様ニ・・」との記事がみられる。この付近では，平成 11 年度に岩手医科大学の関連施設建設に伴う発掘調査がおこなわれ，堀底部分より盛岡城３期の矢穴（やあな）列が残る花崗岩が多く確認されている。

表４　石切丁場（伝承地）及び関連遺跡

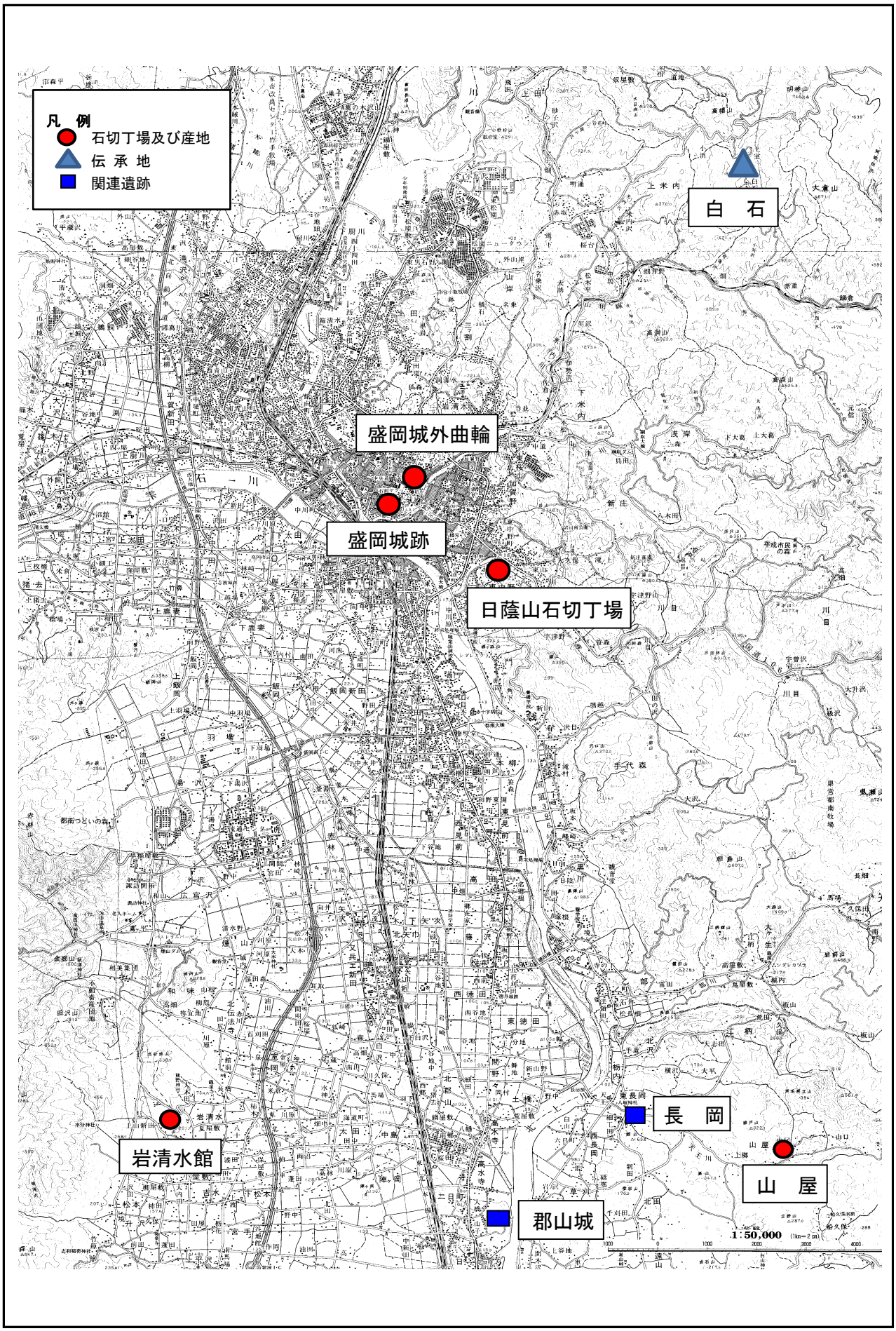
名　称	所 在 地	城までの直線距離	時　期	産状ほか
日蔭山石切丁場（金勢遺跡）	東中野字金勢ほか	約 2.2km	18 世紀中頃	・転石が斜面に露出しており，一部の石には矢穴が見られる ・南側には近代以降の採掘坑あり
盛岡城跡（内曲輪）	内丸 57-1 ほか	城　内	16 世紀末～17 世紀	・毘沙門橋際等に矢穴のある残石が見られる
盛岡城外曲輪	中央通一丁目ほか	約 400m	16 世紀末～17 世紀後葉	・発掘調査により堀底から矢穴のある石が確認されている
白　石	上米内字白石地内	約 10km		・築城の際に石垣を採取したという伝承あり ・山の斜面に転石がみられる
長　岡	紫波郡紫波町長岡地内	約 15km	17 世紀	・長岡地区よりもさらに３～４km 東側の山屋地区より石材を採取し，長岡より舟で石材を搬出 ・長岡八坂神社の北西には，矢穴のある石が散見される
岩清水館跡	紫波郡矢巾町字岩清水地内	約 14km	16 世紀末～17 世紀	・遺跡内にある大石に，矢穴列の見られるものあり ・供給先は不明。

城内の残石（腰曲輪下南東側）

城内の残石（三ノ丸東側内堀）

日蔭山の転石

日蔭山の転石（矢穴あり）



第８図　石切丁場と関連遺跡の位置

（４）城下町の変遷（32～34 頁第 10～12 図参照）

盛岡城下のまちづくりの基本は「五の字形」といわれている。第２代藩主南部利直が城下町づくりについて家臣に意見を求めたところ，重臣の北信愛（きたのぶちか）が「一の字形は街道沿いの交通量の多い地に適し，盛岡のように往来の少ない地は，城を取り囲むように侍町を連ね，また見通しのききにくい五の字形にすべき」と答えたと伝えられている。

城下町の形成は慶長３年（1598）からの盛岡城築城を契機とするもので，慶長４年（1599）から本格的な城下町整備が進められ，現在の中心市街地の基礎が構築されていった。

城下町は既存の河川を利用し，内曲輪の北側を囲むように水堀と土塁を三重に巡らせており，内曲輪の外側には南部氏一族や盛岡藩の重臣たちの屋敷が存在した外曲輪を配し，大手・中ノ橋・日影の三門を設け出入りを管理した。

また，外曲輪を囲むように東側の中津川対岸を含んだ地域に遠曲輪（総構え）を配置した。遠曲輪には仁王・四ツ家（よつや）・寺町（てらまち）（花屋（はなや）丁）・下小路（したこうじ）・加賀野・八幡丁・新山（しんざん）（穀丁）に惣門（そうもん）を設けるとともに，城下への出入口に枡形を設け，その内側に組丁（くみちょう）と呼ばれる足軽（同心）の屋敷地を配置し，出入りを管理していた。

さらに南部氏ゆかりの寺院も領内から順次移された。三戸からは，南部氏の墓所がある聖壽（しょうじゅ）禅寺（ぜんじ）（臨済宗妙心寺派）や永福寺（えいふくじ）（真言宗），教浄寺（きょうじょうじ）（時宗），報恩寺（ほうおんじ）（曹洞宗）が，遠野からは東禅寺（とうぜんじ）（臨済宗）を移した。これを盛岡五箇寺という。さらに，城下町の東側には八幡宮，天満宮，住吉神社等を配している。

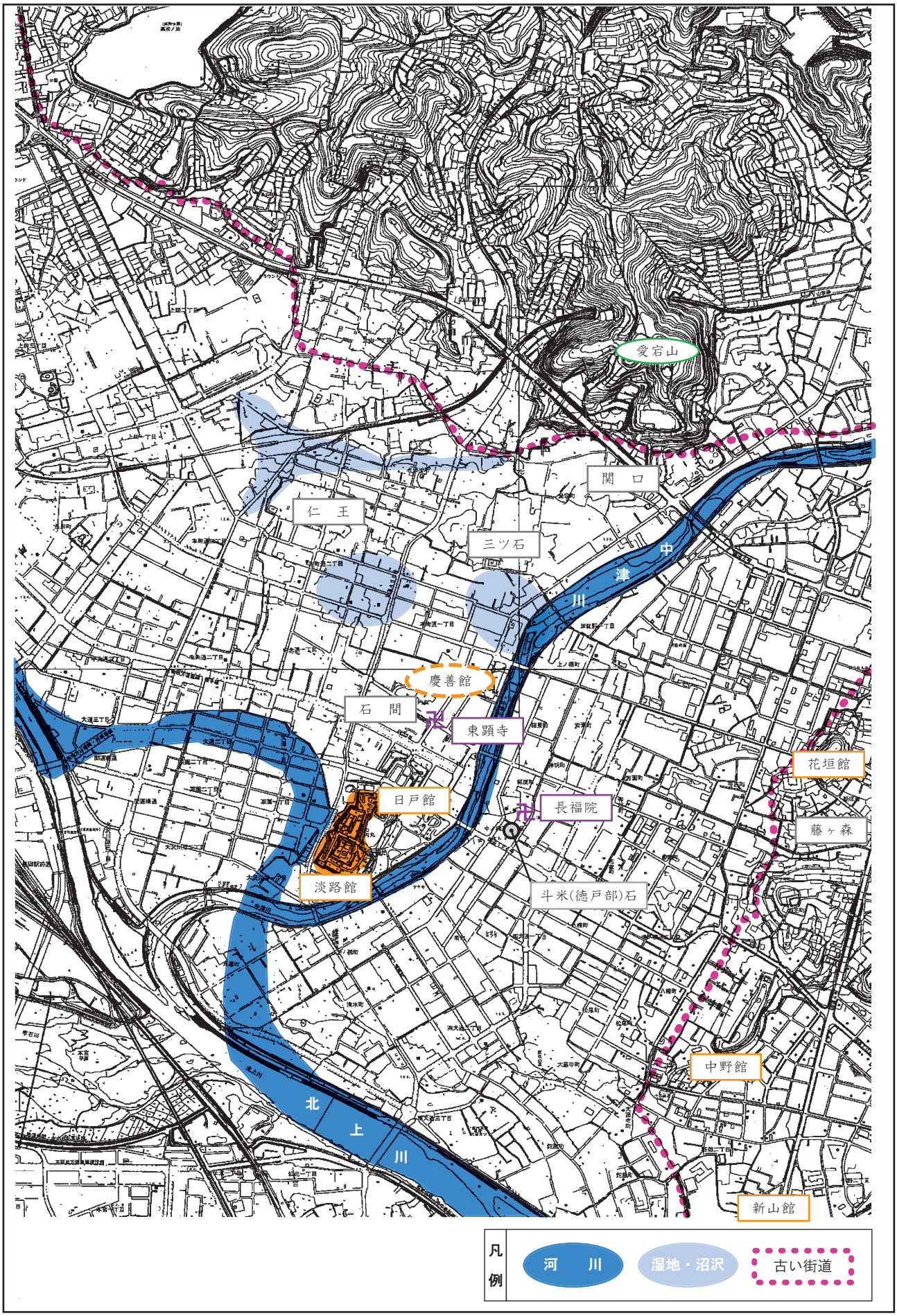
町名は，重臣（高知（たかち））屋敷の内丸，武家屋敷の侍丁・同心丁とし，町家は三戸丁・津軽丁・仙北丁など出身地にちなんだ町名，油（あぶら）丁・大工丁・鍛冶丁など職業にちなんだ町名，六日丁・八日丁の市日にちなんだ町名等がつけられた。さらに慶長 14 年（1609）には，中津川に上ノ橋がかけられ，中ノ橋が慶長 16 年（1611），翌年の慶長 17 年（1612）には下ノ橋が相次いでかけられ，新しいまちづくりの基礎が固められている。

城下町の建設と並行し，度重なる洪水等のため難航していた築城工事も約 40 年間を費やして寛永 10 年（1633）に一応の完成をみることとなった。それに伴い南部氏は盛岡城を藩主の居城と定め，名実ともに藩の中心都市としての城下町となった。

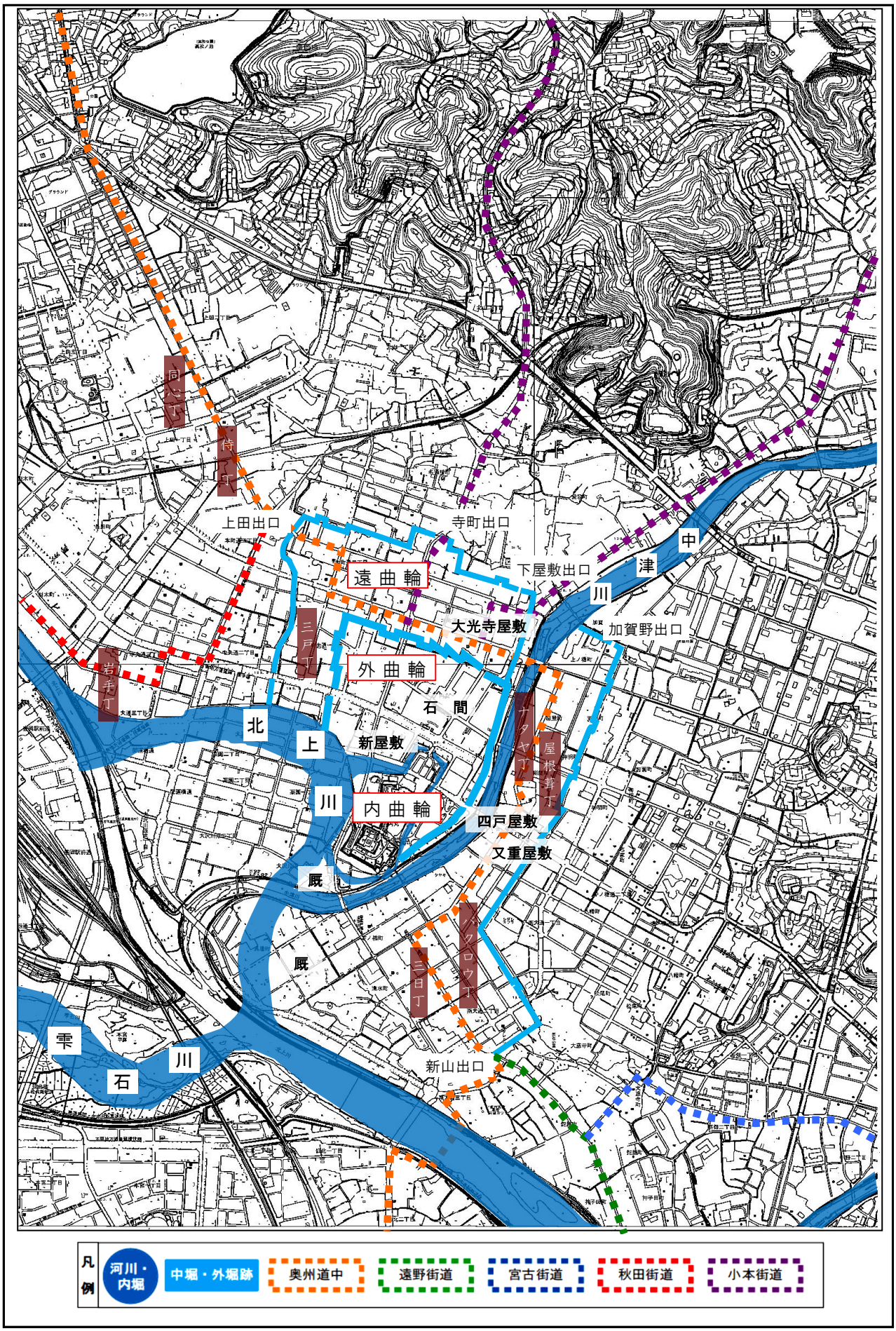
城下はその後も拡大を続け，江戸時代中期の延宝３年（1675）には北上川の流路が付け替えられたほか，明暦２年（1656）には北上川に夕顔瀬（ゆうがおせ）橋がかけられ，延宝８年（1680）には仙北丁と新山河岸（しんざんかし）を結ぶ新山舟橋（ふなばし）が完成している。また，流路の変更に伴い，大沢川原や帷子（かたびら）丁・長丁などの新しい町もできたほか，夕顔瀬橋の架橋に伴って同心丁（新田町）もできたことにより，北上川の西側にも市街地が拡大している。

なお，その後の時期に描かれた城下絵図等をみると，城下の拡大は概ねこの時期に完成しているようである。

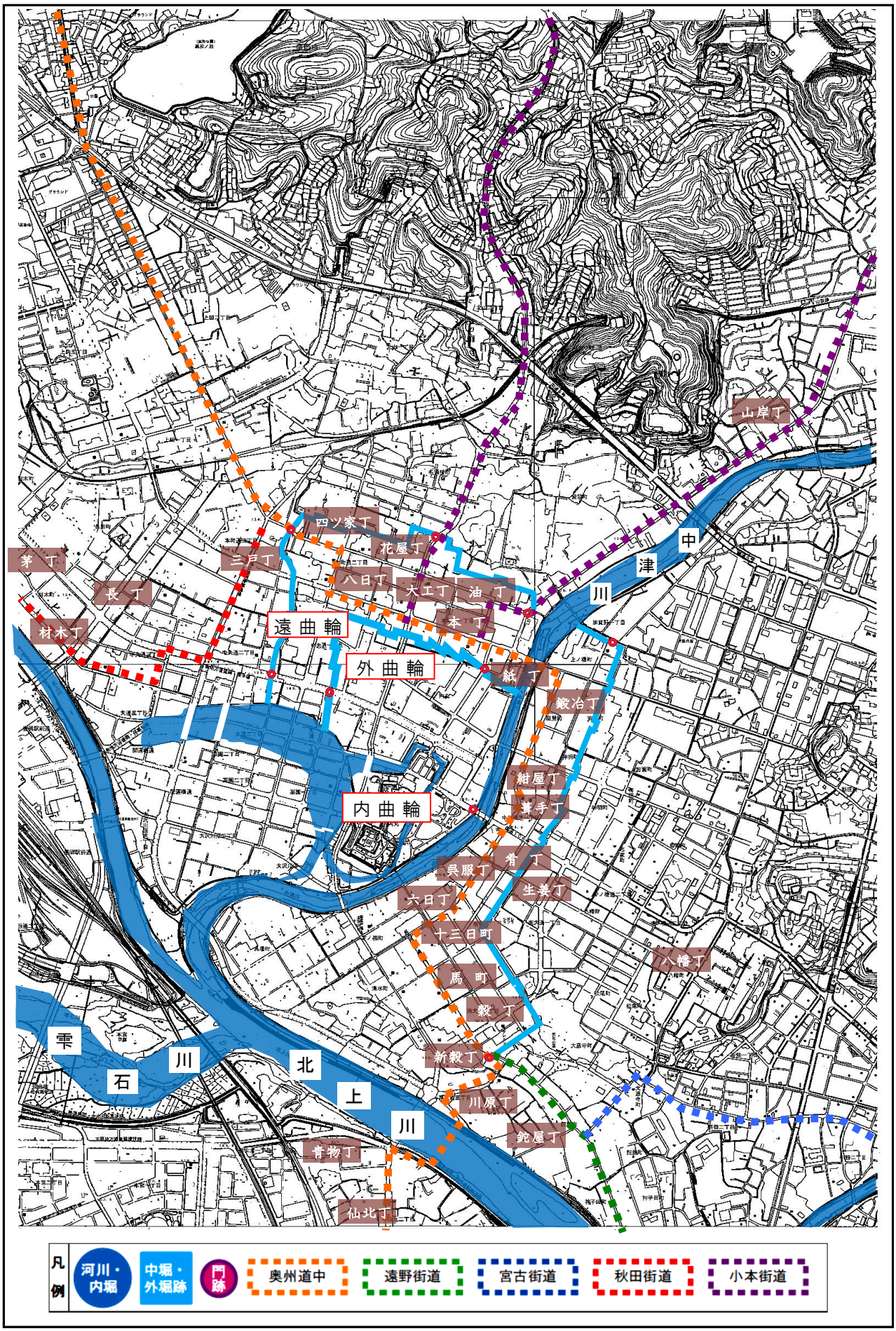
幕末における城下町の範囲は，江戸時代中期以降あまり変化がないようであるが，諸氏屋敷の上田新小路や加賀野新小路が新たにつくられている。



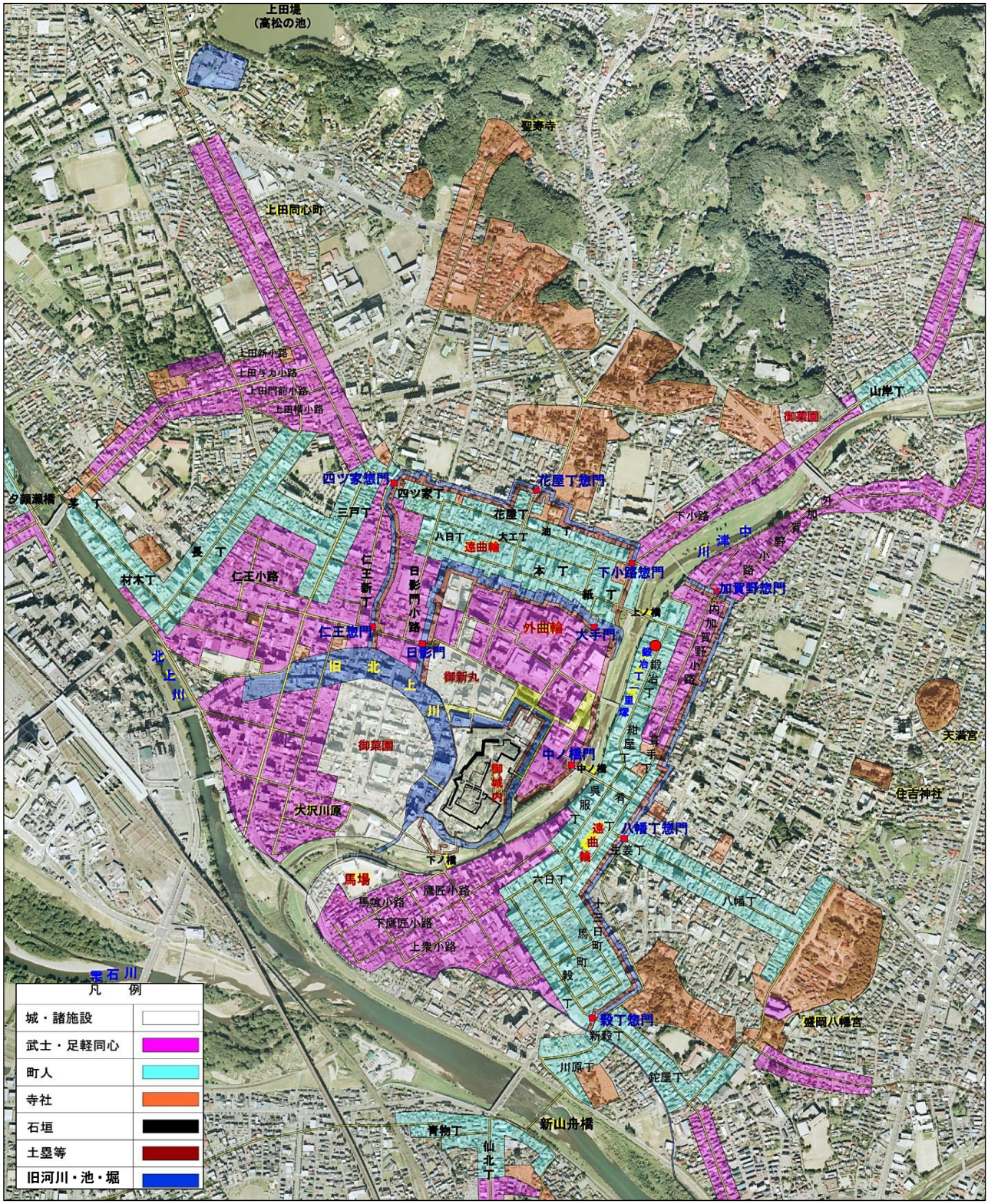
第９図　城下の変遷（中世の不来方周辺）



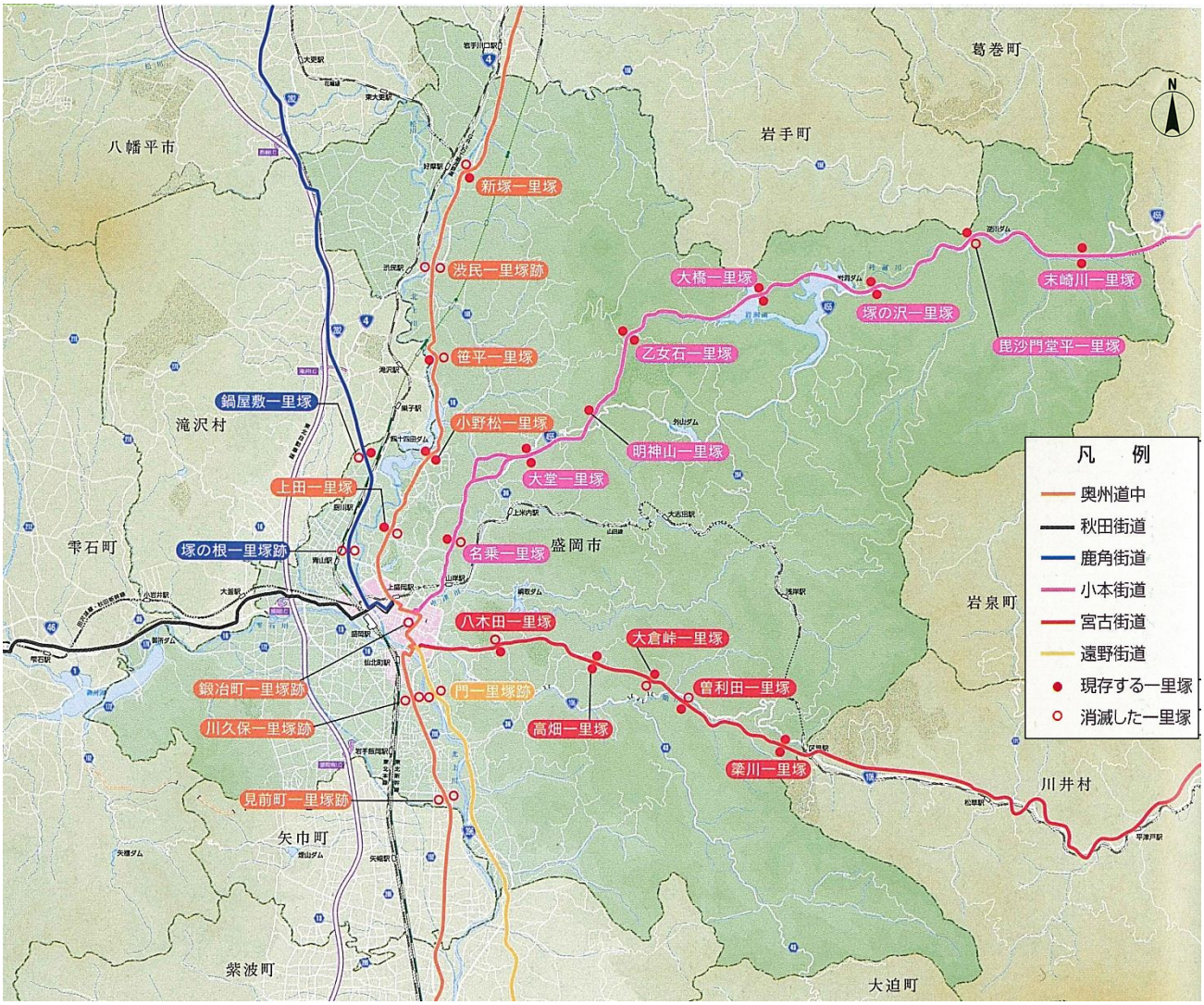
第10図　城下の変遷（概念図　江戸時代前期）



第11図　城下の変遷（概念図　江戸時代中期～後期）



第 12 図　城下町の町割りと旧町名の分布



第 13 図　現在の交通網と主要な旧街道の分布

※もりおかの文化財（2008）より引用